
共作と競作のはざまで—15世紀のシスティーナ礼拝堂壁画装飾事業における ボッティチェッリ作《モーセの試練》と《反逆者たちの懲罰》

荒木文果（日本学術振興会特別研究員）

1481年、サンドロ・ボッティチェッリは、教皇シクストゥス4世の命により、教皇の礼拝堂であるシスティーナ礼拝堂壁画装飾事業のためにローマへ招聘された。そして彼は、当代一流とされた親方達コジモ・ロッセリ、ドメニコ・ギルランダイオ、ピエトロ・ペルジーノと共に、システィーナ礼拝堂壁面の中層に〈モーセ伝〉と〈キリスト伝〉連作をフレスコ技法で描いた。制作にあたっては、各画家に同じ大きさの横長の画面（約3.40・5.40m）が割り振られ、ボッティチェッリは《キリストの誘惑》《モーセの試練》《反逆者たちの懲罰》の3場面を担当した。この装飾事業に関して、16世紀の伝記作家ヴァザーリは、『ボッティチェッリ伝』の中で、「サンドロはフィレンツェの画家やその他の市の画家と一緒に競争をし」と述べている。

15世紀のシスティーナ礼拝堂装飾壁画に関しては、図像学的側面について、多くの解釈が提示されてきた。また、画家たちが壁画の全体的な統一感を重視し、地平線の位置や人物像の大きさ、色彩の利用法に関して一定の取り決めを行っていたという共同制作についての諸問題も考察されてきた。一方で、本事業における画家たちの競作という側面に関しては、常に指摘されながらも、その実態解明が十分になされているとは言い難い。そこで本発表では、ボッティチェッリが制作した《モーセの試練》と《反逆者たちの懲罰》をとりあげ、画家が壁画全体の調和に配慮しながらも、独自の画面を構想して、他の画家達との差別化を図っていたと考えられることを明らかにする。

発表ではまず、〈モーセ伝〉と〈キリスト伝〉連作の制作過程について、広く受け入れられているエッティンガー説（1965年）とは異なった新しい見解を提示する。その上で、従来ボッティチェッリのローマ時代の仕事として一括りに考察される傾向があった3場面は、《キリストの試練》《モーセの試練》《コラの懲罰》の順に、画家の創意の変遷を証言するものであるという視点から、特に「モーセ伝」2点の画面構成上の特異性を、他の画面との比較によって指摘する。続いて、ボッティチェッリの画業において、他の画家との取り決めの下で競作を行うというシスティーナ礼拝堂壁画装飾事業と類似した制作の機会を取り上げ、画家が意図的に消失点を低くおくことで、観者を画面内に取り込むと同時に、人物像が前面に迫ってくるような効果を創出していると考えられる点を指摘する。さらに、システィーナ礼拝堂壁画において、これまで、ほとんど注目されてこなかった前景の建築物及びそれによって規定される消失点の位置に注目し、それらが前例と同様の効果を創り出すと共に、観者の視線を前景で展開する物語場面に集中させる役割を担っていることを明らかにする。

考察の中心をなす2画面に関しては、従来、全体の壁画との統一性がとれてないことから消極的に評価されることもあった。しかし、発表からはドナテッロといったフィレンツェの先達が既に用いていた仰視的遠近法を応用して、ボッティチェッリが他の画家とは異なる方法で画面を構想した過程が浮き彫りになる。